

第5回 和歌山県友ヶ島 みんなで島のゴミ拾い!!

2011/04/24

島ゴミプロジェクト実行委員会

目次

1. 友ヶ島略歴
2. 友ヶ島における漂着ゴミの現状
3. 活動概要
4. ワークショップ
5. 島ゴミプロジェクト実行委員会について
6. 代表者後記
7. 写真集

1. 友ヶ島の略歴

友ヶ島は紀淡海峡に緩やかな曲線を描いて浮かぶ神島、地の島、沖ノ島、虎島の四島を合わせた総称で定期船の着く沖ノ島の最高峰、コウノ巣山(120m)には1等三角点が埋設されている。加太港からの高速船で約20分、沖ノ島の野奈浦栈橋に着くとそこはもう南国の楽園であり、少し前までは電気も自家発電でまかなっていた自然のままの島である。

島の歴史として友ヶ島は江戸幕府の頃から大阪湾に出入りする船舶を監視するうえで重要な位置にあり、紀州藩は嘉永7年(1854年)に幕府の命により、加太に友ヶ島奉行を置き友ヶ島に藩士を常住させた。

明治21年には島は陸軍の軍用地となり、国を守るために対岸の加太町深山に兵隊が住む兵営が作られ、友ヶ島と加太町深山に砲台が築かれた。以来、この一帯は由良要塞地帯として、昭和20年8月に第二次世界大戦が終わるまで一般人は近づくことも禁止されていた。

島内には大戦中の施設も多く残され、六カ所の砲台跡のほか紀伊防備隊の海軍聴音所、弾薬庫、軍馬舎、将校官舎、厠なども当時の面影を偲ばせている。また、島内の歩道は大部分がかつての軍用道路であり今も舗装されておらず、風情ある道路で島内を巡ることが出来る。昭和24年に瀬戸内海国立公園の一部となって以後は、全国的な観光地として開発が進められ、たくさんの人がマリンレジャーや自然観察、ハイキングに訪れている。

(和歌山市加太観光協会及び社団法人和歌山県観光連盟のHPより抜粋)



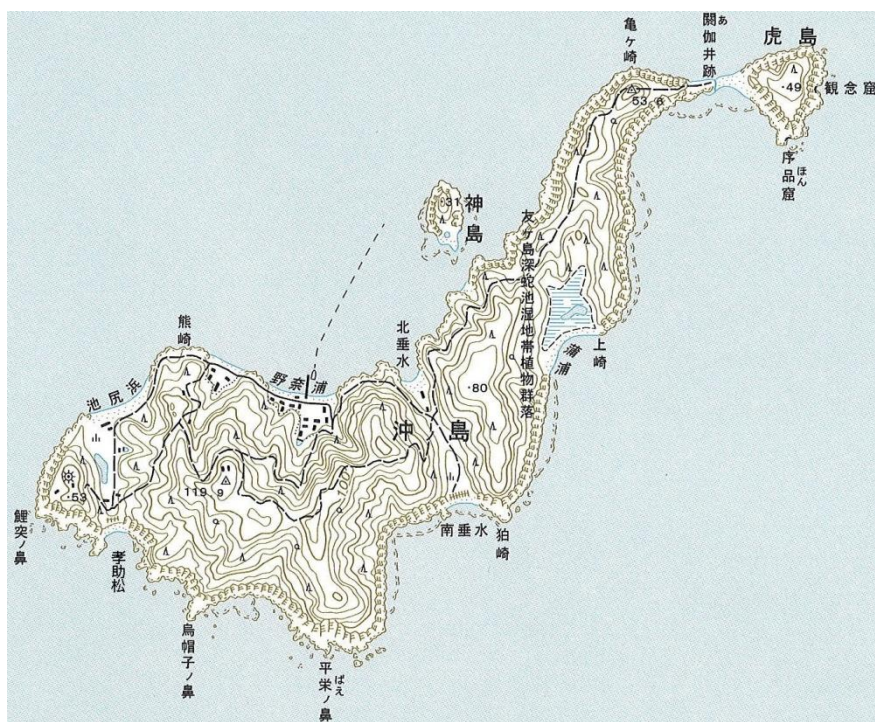
2. 友ヶ島における漂着ゴミの現状

平成23年4月24日に北垂水にて清掃活動を実施したが、それに際し、平成23年4月10日に事前に漂着ゴミに関する調査を行った。調査は徒歩による目視観察を主とし、各箇所において現況写真の撮影を行った。調査箇所は、北垂水、南垂水、野奈浦である。

過去数回の事前調査では島の南側に位置する南垂水、孝助松海岸では明らかに島の北側に位置する北垂水、熊崎の東の海岸、池尻浜に比べて漂着ゴミが少なく、島の南側よりも北側により多くのゴミが漂着する傾向が強く見られていた。

しかしながら、今回の事前調査では、太平洋に面した南側の南垂水において、例年に比べてゴミの増加が認められた。推測の域を出ないが、これは平成23年3月11日に東北地方で起こった東日本大震災に起因する津波の影響が少なからずあったと思われる。また南垂水にて確認したゴミの中には、比較的高い割合で外国籍のゴミが交じっていたことから、洋上のゴミが通常とは違う形で一挙に島へ押し寄せたことが推測される。

とはいえ南岸において例年以上のゴミを確認したものの、島の南側よりも北側により多くのゴミが漂着する傾向は依然として顕著である。これは海流、季節風、地形等様々な要因が考えられる。例外的に島の北側に位置し、高速艇乗り場の在る野奈浦での漂着ゴミは少なかったが、これは職員の方による清掃活動によるものである。又、北垂水では流木等の自然物に混じり、あらゆるプラスチック製品やその破片が漂着すると共に散乱し、ゴミの量、種類とも他の箇所を圧倒していた。ただ、視覚的な検証のみではあるが、毎年毎年ゴミの量は少しずつ減少している印象を受けている。希望的な観測ではあるが、毎年大規模な清掃活動を実施することにより、ゴミの減少があると推測される。



3. 活動概要

日 時：平成 23 年 4 月 24 日(日) 09:30～16:30

訪問先：和歌山県友ヶ島

活動地：友ヶ島北垂水

目 的：海岸の漂着ゴミ拾い 及び ゴミに関する学習(ワークショップ)

集 合：友ヶ島乗船場 09:30

※南海加太線「加太駅」より徒歩約 15 分

(10:00 の観光船に乗船、16:30 の観光船乗船をもって解散)

持ち物：お弁当・水筒・軍手・防寒具・帽子・タオル

主 催：島ゴミプロジェクト実行委員会

(NPO 法人ゴミミンゴ・ゴミ拾いネットワーク/ビーチクリーン土佐/
NPO 法人スマイルスタイル)

後 援：和歌山市

参加者：80 人

ゴ ミ：211 袋



4. ワークショップ

【ワークショップ報告書 JEANキャプテン ビーチクリーン土佐 梅田アキ 監修】

無人島になぜこれだけのごみが流れ着くのでしょうか。そして私たちの住む市街地や道路にもごみを捨てる人もいます。なぜごみが不法投棄されたり、無人島にごみが大量に漂着するのか。そこには便利になった私たちのライフスタイルや企業の不法投棄、自然環境の変化などさまざまな理由が関係しています。

友ヶ島で開催したWSでは、ごみを拾う体力や労力を感じられますが、ごみ問題全般において、拾い続けるだけでは解決はしない、根本的なごみを出さない解決法、原因について話し合いながらゴミ問題の現状を聞いていただく時間を作りました。

ワークショップは、参考資料の写真やサンプルゴミを見てもらうために、主に問題になっているごみの種類を5つと5人のスタッフに参加者の方をグループわけして実施しました。

ここからは、5つのごみのワークショップをした、担当スタッフも初めての試みです。“伝える側”の体験感想をふくめて、ワークショップの内容を報告いたします。

内容：「危険ゴミ」について

担当：梅田アキ（ビーチクリーン土佐代表）

海岸には、素手で触ったり不用意に開封したりすると危険なごみもあります。それにはどんなごみがあるのか、またごみを拾うための安全マニュアルもふくめてお話ししました。

特に多い危険ごみは、糖尿病でインスリン投与に使う注射器や注射針です。一般に使用される、一番身近であり、使い捨て頻度の高い医療器具です。針がむき出しになっていると、足のうら、指先などに刺さる危険性があります。

その他には未開封のペットボトルやスプレー缶、オイル缶など。どれも太陽熱で容器内が高温になっていて、開封すると暴発する可能性があるため、これらは危険ごみとして別に分別します。



内容：「友ヶ島のゴミ」について

担当：佐々木瑞穂（NPO 法人スマイルスタイル）

友ヶ島は、淡路島の東に浮かぶ4つの島の総称で、多くの自然に恵まれ、特に夏はマリ
ンレジャーや自然観察・ハイキングを楽しむ観光客で賑わう島ですが、海流の流れによっ
てたくさんのゴミが漂着する島でもあります。

それは、日本のごみだったり、
海外のゴミもたくさんあります。
牡蠣や、わかめなどおいしい海産
物が採れるのにも関わらず、ごみ
がたくさんある海で採れる海産
物という、レッテルを張られ、風
評被害に合い漁業にも影響があ
ります。



私たちが住んでいる地域から
出ているゴミは、街を経て、川を下
り海へ流れ着き、瀬戸内海の島や太平洋へ流出していきます。島と繋がっていることを実
感し、ライフスタイルを見直すきっかけや、できることを見つけてほしいと思っています。

内容：「微細ゴミ」について

担当：田川香絵（NPO 法人スマイルスタイル）

参加者の方にお話させていただいた内容

- 友ヶ島の海岸には、たくさんの漂着ゴミが流れ着きますが、プラスチックゴミが大変多
い。
- プラスチックゴミは、長い年月をかけ衝撃や太陽光による劣化で粉砕し小さく小さくな
るが、自然に還ることはなく、絶対になくならないゴミである。
- 小さく粉砕されたプラスチックゴミは海岸に残り続け蓄積されていく。波に乗って海に
流れていく。
- プラスチックの原材料となるレジンペレットが、最近大変な問題になっている。
- レジンペレットは大型トラックで運ばれることが多く、風に流され海岸まで運ばれてく
るケースがある。今回のごみひろいでも多くみつけることができると思う。
- レジンペレットは小さいため、動物がまちがって食べてしまい命を落とすケースがたく
さん報告されている。（誤食→消化されず胃に残る→満腹感が続き餌を食べなくなる・
器官に詰まるなど→窒息・栄養失調→死亡）

実物のレジンペレットや動物の被害にまつわる写真を使いながら説明をしたので、わかりやすく説明ができたと思います。プラスチックという、参加者にとっても大変身近な素材に関する説明だったので興味をもって真剣に聞いてくださいました。自分たちの生活が、海につながっていることを少しでも感じていただけるよう進行を努めました。

これまでは“聞く側”としてワークショップに参加していましたが、今回“する側”として事前に勉強する中で、これまで知らなかったことや、なんとなくでしか理解していなかったことをしっかりと認識することができ、自分自身にとって大変勉強になりました。このような機会をいただきありがとうございました。

内容：「ゴミがもたらす動物への被害」について

担当：圓谷常樹（NPO法人ゴミンゴ・ゴミ拾いネットワーク）

ゴミは人間の視覚や美への意識に悪影響を与えるだけではありません。人間以外の多くの生物にも様々な影響を与え、今日においてゴミを拾うということは、私たち人間のためだけではなく、また回りまわって最終的には人間の生活に還ってくるという話です。

ゴミと餌の区別がつかない動物が誤飲、誤食をし、死因の一つになっています。人間はゴミを識別できるので、ゴミ拾いができます。でも、動物には出来ません。ゴミと餌の区別がつかないので、どうしても誤飲・誤食してしまいます。

特に、プラスチック・ゴミは分解しないので、消化されずに胃袋にたまり、満腹感を感じるわけです。そうすると、本来食べるべき餌を食べられなくなってしまい、死んでしまうこともあるわけです。

他にも漁業で使う網が放置されて、それに好奇心で近づいた鳥が網に引っかかり、逃げられなくなって死んでしまう事もあります。

人間誰もゴミを出します。でも1人でも多くの方が拾う側に回れば、理想を言うならばゴミを出さないようにすれば、私たちが普段食する肉や鳥、魚を守ることが出来ます。その結果、人間の食生活も安全なものになるでしょうし、自然環境も守っていけるのではないかと、ということです。



今日、ゴミ拾いを終えて家に帰り、少しでも生活を見直すきっかけになれば良いかと願っています。

内容：「漂着ゴミ」について

担当：松原正太（大阪商業大学経済学部原田ゼミナール）

特に海岸に多いのは、漁業関係のごみです。たいていはトロ箱と呼ばれる漁港で肴を入れる大きなプラチックの箱型容器やつり用具、小さな漁網などですが、台風の影響を受けやすい海岸では、地引網などの人の力だけでは回収できないおおきな漁網もあります。その漁網は、海岸に流れ着くまで漂流しながら水鳥、アシカ、海がめなどに絡まりおおくの動物に被害を及ぼしてゴーストフィッシングと呼ばれ世界で問題になっています。

漂着ゴミによる被害や現状を簡単に説明すると、景観の悪化があり、ゴミによる景観の悪化は観光客の減少に繋がり、経済的にも影響を及ぼします。漁業や海運の影響は、水産物にゴミが混入すると取り除く作業をしなくてはならず、またゴミが船のスクリューに絡まることがあります。ゴミの危険は、ガラス片や針金、木材に打ち込まれたままの釘など、怪我をする恐れがありますが、もっと恐ろしいのが注射器で、怪我の他に感染症になる危険があります。その他にも様々な問題があります。

ゴミのほとんどは生活ゴミであり、私たちの知らないところで環境に様々な悪影響を与えています。正直ゴミを拾い続けても全てなくなることはありません。けれど放っておくとさらに酷くなります。ならどうするか。拾ってゴミを減らすだけではなく、私たちがゴミを減らすこともすべきです。人々がゴミに対しての関心、意識を持っていればゴミのポイ捨てを減らせるかもしれません。しかし、全ての人に意識してもらうのは難しいことかもしれませんが、今回のような活動に参加してもらい、一人でも多くゴミに関心や意識をもってもらうことが、ゴミをなくす近道だと思っています。



5. 島ゴミプロジェクト実行委員会について

今回からNPO法人ゴミンゴ・ゴミ拾いネットワーク、ビーチクリーン土佐、NPO法人スマイルスタイルの三団体が協力して、新たに「島ゴミプロジェクト実行委員会」という団体を立ち上げました。これは主催/共催というような関係ではなく、スタッフが各々フラットな立場でイベントをよりよくしていくためのものです。

また「島ゴミプロジェクト」という名前には、おいてけぼりにされがちな島のゴミについてもっと真剣に考えていこうという思いが込められています。都会に暮らす人間にとって、島は気軽に毎日行けるような場所ではありません。もし仮にゴミを拾おうと思っても、拾ったゴミを本土に運ぶということが高い壁として立ちはだかり、方法を思いついたとしてもその費用について考える必要があります。島はゴミを拾う人間にとってクリアすべき様々な課題があり、課題の解決がなかなか困難で島のゴミは後回しにされてしまいます。

私たち島ゴミプロジェクト実行委員会では、友ヶ島でのゴミ拾いイベントを足掛かりに、友ヶ島以外の島でのゴミ拾いの機会も増やすことを目標としています。

友ヶ島に来るとよくわかるように、島のゴミのほとんどは都会のゴミが流れついたもので、島由来のゴミはほんの僅かです。都会から大量のゴミが流れていることを考えると、友ヶ島だけが都会のゴミに覆われているのではなく、無数の島・海岸もまた都会のゴミで覆われていることは想像に難くありません。

多くの島でゴミ拾いの機会を設けることによって、島でのゴミ拾いをする人が増え、島ゴミに関心が向き、島でのゴミ拾いの状況が様々な形で伝播することによって、島だけではなく、ひいては社会全体のゴミについての意識やゴミの状況が改善されるのではないかと考えています。

島ゴミプロジェクト実行委員会では新たにメンバーになってくれる方を募っています。はじめに書いた三団体のいずれかに属していなくても、島ゴミプロジェクト実行委員会のメンバーとなって企画立案に携わりたいという方、企画立案は無理だけど当日のスタッフとして協力したいという方がいらっしゃいましたら、ぜひお声を掛けていただけたらありがたいです。

最後は宣伝になってしまいましたが、これからも島にゴミがある限り末長くお付き合いいただければありがたいと思います。

6. 代表者後記

今年の「第5回友ヶ島みんなで島のゴミ拾い！！」を開催するにあたり、主催者として約一カ月前に起こった東日本大震災について考えないわけにはいきませんでした。

「東北地方において甚大な被害があるときに、ゴミ拾いなんてしてる場合なんだろうか」、「友ヶ島の海岸でゴミ拾いをしているときに、近くで大きな地震が起こった場合、参加者の安全は確保できるのだろうか」、この二つの大きな問題が常に私の頭を悩ませていました。

前者の問題については、こういうときだからこそ普段の生活を普段通りにするべきだと考え、頭の中では決着をつけていました。しかしながら、後者の問題に関しては、いつどこで地震が起こるかという問題と密接に関わっており、私個人の能力では到底想像もつかない次元の問題になってしまい、いくら考えても決着のつかない問題でした。結果的には地震も津波も起こらず、お陰さまで無事にイベントを終えることができたわけですが、結果論として大丈夫であったというだけではイベントの主催者として、責任を果たしているとは言えないと思います。とはいえ、地震と津波の問題は、東日本大震災直後であろうとなかろうと、常に可能性はあるのであって、どこまで備えることが適切であるかということとは、簡単に正解に辿りつくものではありません。

また正解に辿りつけないものということに関しては、イベントの内容も毎年スタッフで試行錯誤を繰り返しています。参加者の皆様が友ヶ島のゴミ拾いイベントに参加いただくことによって、楽しんでもらったり、何かを持って帰ってもらえたりするように様々な趣向を凝らしています。第4回には、かねてより要望の多かった島内散策を灯台組と砲台跡組とに分かれて行いました。今回は、ゴミについての学習ワークショップを多めに組み込みました。どちらも実験的な要素も多々あり、それぞれ至らない点もあつたと思いますが、次回以降にスタッフ全員で反省を生かせればよいなと考えています。

今回も様々な方々の協力のお陰で無事にイベントを終了することができました。ただし、イベントの成功の是非は、参加してくれた皆様が生活圏に戻った後にどのような行動を選択するかに懸っていると思います。特に何もしない生活、無闇にゴミを捨てない生活、友ヶ島のゴミの状況をいろんな人に伝える生活、街で川で海でゴミを拾う生活、様々な選択肢があります。少しでもこのイベントが皆様のよりよい選択の手助けとなれば、それ以上の成功はありません。

毎度月並みな言葉で締めますが、皆様本当にありがとうございました。

島ゴミプロジェクト実行委員会 代表 近藤 潤

